

開催にあたって

「地宝のひびき - 和歌山県内文化財調査報告会 - 」は、文化財の発掘調査成果をいち早く県民の皆様に提供し、地域の歴史と文化に対する理解と認識を深めていただくことを目的として実施しています。県教育委員会や県内各市町村の文化財担当者と連携し、平成18年度に第1回を開催してから今年で10年の節目を迎えることになりました。

今回は、平成26年度に行われ、新たな知見を得た6件の発掘調査成果と、本年1月に新たに県指定文化財に指定された考古資料1件についての概要報告です。また、誌上発表でも7件の発掘調査成果を掲載するなど盛り沢山の内容となっています

この報告会を通して、少しでも文化財を身近なものと感じていただくととも に、遺跡の保存や活用についても考えをめぐらせていただく機会になれば幸い です。

最後になりましたが、この報告会を開催するにあたりまして、ご協力・ご後 援をいただきました多くの機関、関係者の皆様方に深く感謝の意を表します。

平成27年7月20日

公益財団法人 和歌山県文化財センター 理事長 櫻 井 敏 雄

開催日程

- 12:30 開場
- 13:00 開会挨拶
- 13:05 「50 年ぶりの発掘調査—和歌山市 岩橋千塚古墳群大谷山 22 号墳の発掘調査—」 和歌山県教育委員会 上 地 舞
- 13:40 「本州最南端の横穴式石室―すさみ町 上ミ山古墳の出土遺物―」 和歌山県教育委員会 黒 石 哲 夫
- 14:00 休憩
- 14:10 「古墳時代の洪水で埋まった畠と水田
 - 一和歌山市 井辺遺跡第36次調査・津秦Ⅱ遺跡第10次調査─」(公財)和歌山市文化スポーツ振興財団 藤 藪 勝 則
- 14:45 「弥生時代の建物跡と古墳を発掘—和歌山市 平井遺跡第3・4次調査—」 (公財)和歌山県文化財センター 山 本 光 俊
- 15:20 休 憩
- 15:30 「荘園開発の拠点?寺院跡の発掘—和歌山市 木ノ本Ⅲ遺跡第12次調査—」 (公財)和歌山市文化スポーツ振興財団 菊 井 佳 弥
- 16:05 「川の下を潜る用水路─橋本市 出塔の水道の発掘調査─」 (公財)和歌山県文化財センター 村 田 弘
- 16:25 「寺院造営集団の居宅? —海南市 木津遺跡の発掘調査—」 (公財) 和歌山県文化財センター 小 林 充 貴
- 16:45 閉会挨拶

開催日時 平成27年7月20日(祝・月)13:00~16:45

会 場 きのくに志学館(和歌山県立図書館) 2 F 講義・研修室 和歌山市西高松一丁目 7 - 38

主 催 公益財団法人和歌山県文化財センター

後 援 和歌山県教育委員会、和歌山市教育委員会、紀の川市教育委員会、 岩出市教育委員会、橋本市教育委員会、すさみ町教育委員会、 公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団、一般社団法人和歌山県文化財研究会

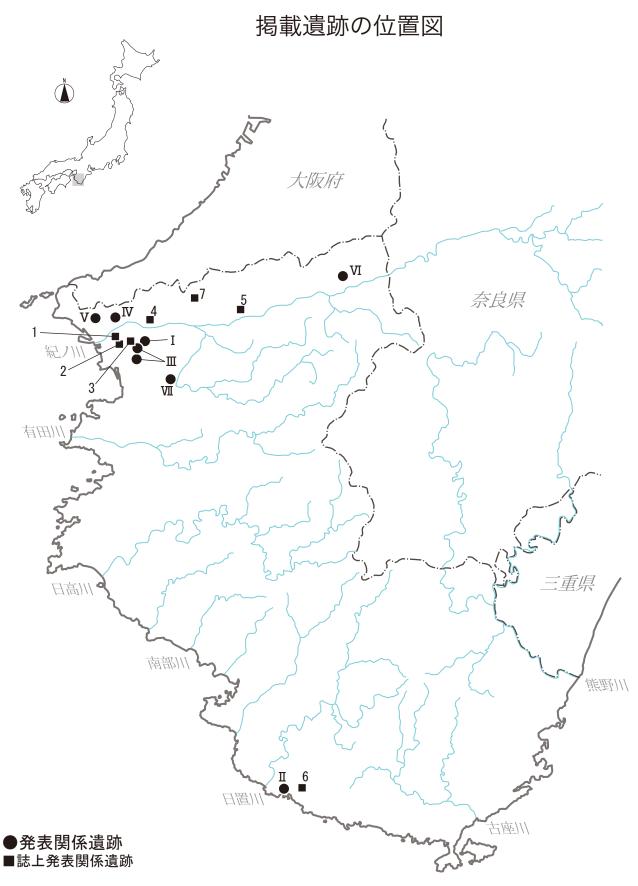
目 次

| | ∃ 程 ⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯ | 3 |
|------------|---|-----|
| ■ 找 | 引載遺跡の位置図 ···································· | 5 |
| ■ 3 | 美 表 | 6 |
| Ι | 50 年ぶりの発掘調査―和歌山市 岩橋千塚古墳群大谷山 22 号墳の発掘調査― | |
| _ | 和歌山県教育委員会 上 地 舞 | 6 |
| Ι | 本州最南端の横穴式石室―すさみ町 上ミ山古墳の出土遺物― 和歌山県教育委員会 黒 石 哲 夫 | 10 |
| Ш | 石墳時代の洪水で埋まった畠と水田 | 10 |
| | 一和歌山市 井辺遺跡第 36 次調査・津秦 II 遺跡第 10 次調査― | |
| | (公財)和歌山市文化スポーツ振興財団 藤 藪 勝 則 | 14 |
| IV | 弥生時代の建物跡と古墳を発掘―和歌山市 平井遺跡第3・4次調査― | |
| | (公財) 和歌山県文化財センター 山本光 俊 | 20 |
| V | 荘園開発の拠点?寺院跡の発掘―和歌山市 木ノ本Ⅲ遺跡第 12 次調査― | |
| | (公財) 和歌山市文化スポーツ振興財団 | 26 |
| VI | 川の下を潜る用水路一橋本市 出塔の水道の発掘調査― | |
| | (公財)和歌山県文化財センター 村田 弘 | 30 |
| VII | 寺院造営集団の居宅?一海南市 木津遺跡の発掘調査一 | 22 |
| | (公財) 和歌山県文化財センター 小 林 充 貴 | 33 |
| | 表 上 発 表······ | 36 |
| 1 | ・ ニール・ | 00 |
| • | (公財)和歌山市文化スポーツ振興財団 井馬好英・西村 歩 | 36 |
| 2 | 和歌山城二の丸大奥・裏庭等の発掘調査―和歌山市 史跡和歌山城第 37 次調査― | |
| | (公財) 和歌山市文化スポーツ振興財団 北 野 隆 亮 | 38 |
| 3 | 和歌山県内最古の水田調査―和歌山市 太田・黒田遺跡第 78 次調査― | |
| | (公財) 和歌山市文化スポーツ振興財団 | 40 |
| 4 | 古墳時代から中世にかけての集落縁辺部の様子一和歌山市 川辺遺跡発掘調査一 | |
| _ | (公財) 和歌山県文化財センター 川崎雅史 | 42 |
| 5 | 近世本陣の復元一紀の川市・史跡旧名手宿本陣(第7次)の確認調査一 | 4.4 |
| 6 | 紀の川市教育委員会 森 原 聖 | 44 |
| 6 | | |
| | (公財)和歌山県文化財ヤンター 佐 伯 和 也 | 46 |
| 7 | (公財)和歌山県文化財センター 佐 伯 和 也 ································· | 46 |

^{1.} 本書は、平成27年度に公益財団法人和歌山県文化財センターが実施した「地宝のひびき―和歌山県内文化財調査報告会―」の発表資料集である。

^{2.} 本書掲載資料は、正式な報告書が未刊行のため、今後、各資料の位置付けが変更される可能性がある。

^{3.} 本書の編集は、山本光俊が担当し、川崎雅史が補佐した。



※ローマ数字とアラビア数字は目次のものと一致します。

50年ぶりの発掘調査

一和歌山市 岩橋千塚古墳群大谷山 22 号墳の発掘調査―

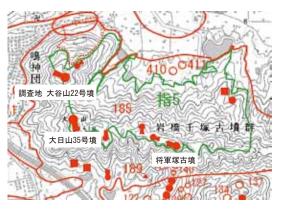
和歌山県教育委員会 上地 舞

1. はじめに

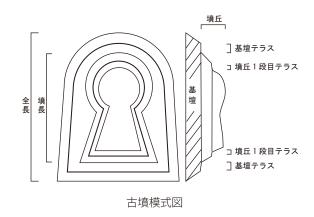
大谷山 22 号墳は、6 世紀前半に築造された墳長約 67m の前方後円墳で当時の首長墓と考えられていました。これまでの調査としては、昭和 39 年に和歌山市教育委員会の委嘱を受けた関西大学考古学研究室により石室及び墳丘の調査が実施されています。和歌山県教育委員会では、当古墳の特別史跡への追加指定に向けて、発掘調査を実施し詳細な測量調査と墳丘規模や墳丘構造の確定を行うこととしました。今回の調査では、古墳の前方部、北側クビレ部、後円部の 3 箇所に調査トレンチを設定しました。



1トレンチは前方部に設置したトレンチです。このトレンチでは、トレンチ北側で基壇テラス及びテラス外側で南北方向の埴輪列を検出しました。さらに、埴輪列より約8m程度西側で基壇の裾を確認しています。2トレンチは、北側クビレ部に設置したトレンチです。このトレンチでは、トレンチ南側で東西方



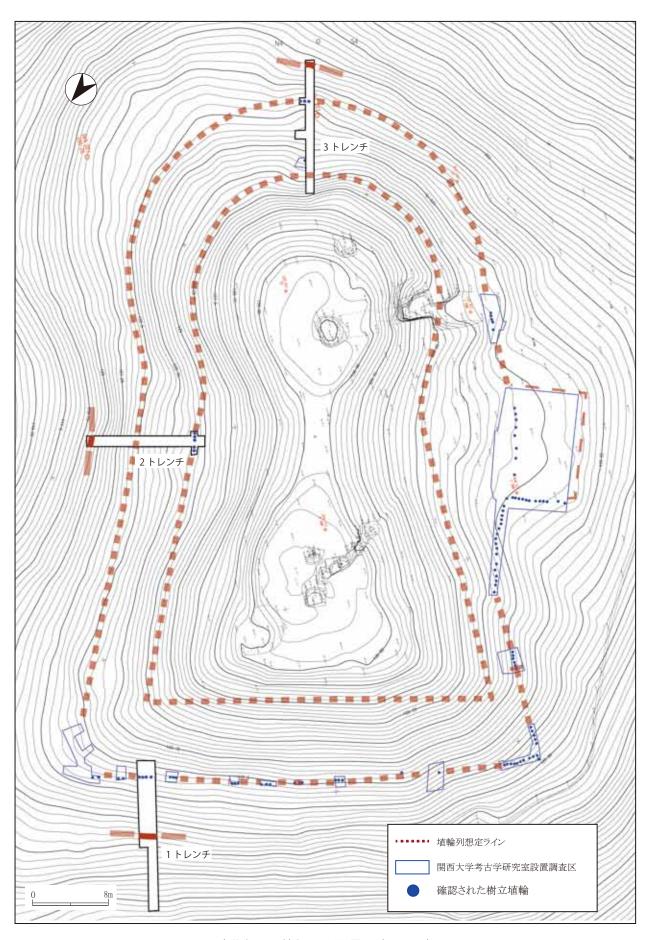
調査位置図 (1/25,000)



向の埴輪列を確認しました。周辺地形及び他トレンチの調査成果から、墳丘1段目に伴う埴輪列である可能性が考えられます。基壇テラス及びそれに伴う埴輪列は、確認できませんでした。埴輪については、現状地形が急斜面であることからみて流失したものとみられます。3トレンチは、後円部にて盗掘坑に重複して設定したトレンチです。1トレンチ同様、基壇テラス及び南北方向の基壇上埴輪列を確認しています。また、盗掘坑南側土層で墳丘1段目に伴うテラス及び裾についても確認しました。

3. まとめ

以上の調査の結果、各トレンチにおいて関西大学考古学研究室が検出した埴輪列に続くとみられる樹立埴輪列が確認され、大谷山22号墳は盾形の基壇の上に2段以上の段築をもつ墳丘構造であることが判明しました。また、全てのトレンチで基壇の裾及び墳丘の裾を確認しており、大谷山22号墳は、墳長が約70mで、基壇も含めた全長が約80mあることがわかりました。出土遺物は、円筒埴輪のほか蓋形埴輪や盾形埴輪、人物埴輪といった形象埴輪、須恵器杯身等を確認しています。古墳の築造時期は、今回の調査から6世紀前半に位置付けられ、大日山35号墳とおおむね同時期に造られたものと考えられます。



大谷山 22 号墳トレンチ配置図(S=1/400)



1トレンチ 全景(東から)



1トレンチ東半 全景(西から)



1トレンチ 埴輪列(南から)



2トレンチ 埴輪列(東から)



2トレンチ南半 全景(南から)



2トレンチ北半 全景(北から)



3トレンチ 全景 (東から)



3トレンチ西半 全景(東から)



3トレンチ 埴輪列(北から)



須恵器



埴輪

本州最南端の横穴式石室

一すさみ町 上ミ山古墳の出土遺物―

和歌山県教育委員会 黒石哲夫

上ミ山古墳は、周参見湾西方に突き出た標高81mの上ミ山山頂に位置している。昭和45年に宅地開発による造成工事中に発見され、翌年、すさみ町教育委員会が発掘調査を実施した。内部主体は東西に約7mの距離を隔てて並ぶ2基の横穴式石室と、その間に箱式石棺1基が築かれていた。造成工事により墳丘の3/4が削平され、西側の横穴式石室と箱式石棺が破壊された。東側の横穴式石室も羨道は破壊されたが、玄室は埋葬時の状態を保っていた。

墳丘は、当初は全長 70m ほどの前方後円墳と考えられたが、その後の検討により直径 40m・高さ 4m ほどの円墳と推定されている。埴輪や葺石は認められなかったが、墳丘の東西斜面の 2 カ所で供献の土器群が確認された。東斜面では蓋杯 3 個体分がかたまって検出され、西斜面では甕・壺・高杯・杯などが粉砕されて帯状に散乱していた。

東側の横穴式石室は、右片袖式で、南に開口する。玄室の規模は、長さ 2.3m・幅 2.1m と正方形に近く、天井高は 1.5m と低い。玄室の壁は、厚さ $10 \sim 15$ cmの扁平な割石を $8 \sim 9$ 段に小口積みし、その上に 5 段の板石を持ち送りで積み、2 枚の天井石を架けている。壁には朱が塗布されていた痕跡がみられる。

床面は奥壁に並行した仕切り石5枚で3区画の屍床を設けている。奥壁から玄門にかけて第1区・第2区・第3区の屍床と呼ぶと、第1区と第2区の屍床には東壁に接したところに小石室を設けている。各屍床には、粘土を敷いてその上に厚さ6~10㎝ほどの礫を敷き詰めている。被葬者の遺体はすでに腐朽していたが、副葬品は礫上や礫中からほとんど埋葬時に近い状態で出土した。装身具の玉類が、すべての屍床で東側からまとまって出土しており、埋葬頭位は東枕である。石室は玄室壁の上部を持ち送る技法と仕切り石を備えた特徴から、九州中・北部の横穴式石室と強い類似性がみられる。

遺物の出土状況については、第1区屍床では被葬者の頭部に接する東小石室に立てかけたような状態で砥石があり、直刀は被葬者の胸部上を斜めに、玄室の東北隅から切先を西南に、刃を南にしていた。その北、奥壁に接して刀子・鉇・鏃などがかたまっていた。また、首部の周辺には水晶製と埋木製の算盤玉 9 点が散乱していた。さらに西壁近くに大小 2 点の斧があり、鏃群が束ねたように重なっていたほか、西壁に接して須恵器高杯 2 点・鈴付高杯 1 点が並び、杯部を西に向けて横にしていた。

第2区屍床では、東小石室と東壁のわずかな隙間に直刀が切先を北に、刃を東に置かれ、被葬者の首部周辺には、碧玉製管玉2点・水晶製算盤玉1点・水晶製丸玉16点・水晶製棗玉16点・金環1点がかたまっていた。また、西壁に接した西北隅には刃先を東にした鑿があり、それよりやや南寄りに鏃が束ねたように置かれていた。

第3区屍床では、被葬者の左側の玄門に接して、直刀が切先を東に、刃を南にして置かれ、被葬者の頭部右側には、矛が先端を東にしていたが石突はなかった。首部周辺には、碧玉製平玉3点・碧玉製管玉10点・水晶製切子玉8点・ガラス製小玉219点・琥珀製丸玉2点・埋木製棗玉4点

が散乱していた。さらに西壁近くには刀子と少数の鏃があった。

主な遺物についてみると、屍床ごとに出土した直刀は、いずれも平背の平造りで、全長 1m をこえる大型のものである。切先のふくらみや茎の細長い造りに特色がみられる。鉄矛は袋内に木製柄の痕跡と止め釘が認められ、全長 21cmである。刃部の断面は菱形で、その袋穂は刃部よりも広い丸棒状の造りである。

鑿は、木製柄は残っていないが、挿入された茎がみられる長さ 19.5cmのもので、先端近くに両肩を付け、刃幅を広くした形で、身は細く、その断面は円形をしている。鉇は刃部尖端をわずかに欠失するがほぼ完形に近く、表向きに反って中央に鎬がある。

平玉はいずれも碧玉製の扁平の玉で、一般的に縁取り平玉と呼ばれ、孔は平らな面に平行に穿たれている。埋木製棗玉は、木目の残った茶褐色の棗玉である。

類例の少ない鈴付高杯は、いわゆる土製鈴を脚の基部に付けた形で、鈴の部分には透し孔を五方にあけ、その内部に粘土丸が2個入っている器高14cmのものである。大阪府の三田古墳や大庭寺遺跡で同様の高杯が出土している。

須恵器杯身の一つには、内面に朱の痕跡が明瞭に遺存しており、石室内に朱を塗布した際に使用された可能性がある。

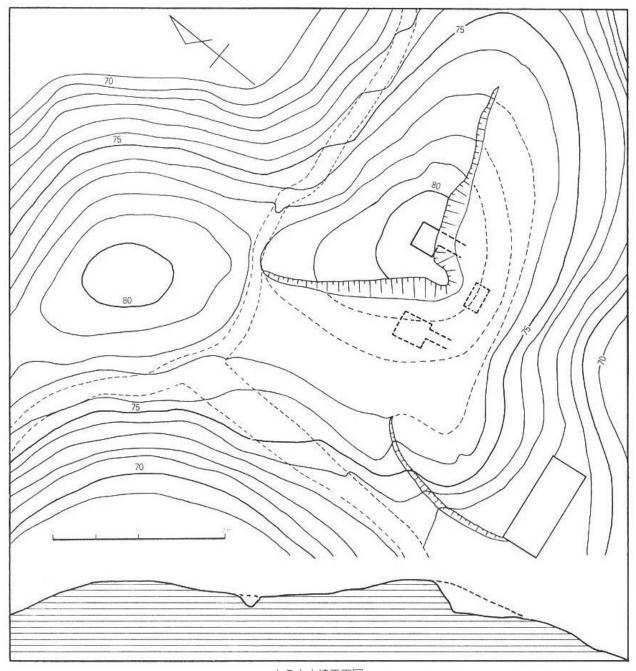
上ミ山古墳の出土遺物は、和歌山県の古墳時代後期の葬送儀礼と当時の副葬品の良好なセット関係を示す重要な考古資料であると考えられる。

たまいた 上ミ山古墳出土遺物

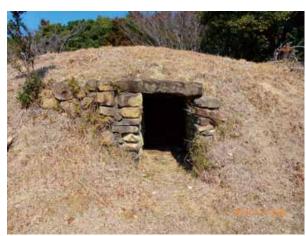
- 1 種別(区分) 美術工芸品(考古資料)
- 2 名称(員数) 上ミ山古墳出土遺物(392 点) 鉄刀3本 鉄製弓飾り金具8点 鉄矛1本 鉄鏃(破片)49本 鉄斧2個 鉄鉇1本 鉄鑿1本 鉄製刀子4本 砥石2個 水晶製菓玉1点 琥珀製菓玉4点 ²塩木製菓玉20点 水晶製切子玉8点 水晶製算盤玉6点 水晶製丸玉16点 琥珀製丸玉1点 碧玉製平玉3点 碧玉製管玉11点 ガラス製管玉1点 ガラス製丸玉1点 ガラス製小玉226点 須恵器高杯3個 須恵器鈴付高杯1個 須恵器杯身5個 須恵器杯蓋5個 須恵器広口壺1個 須恵器広口壺破片4点 須恵器短頸壺破片1点 須恵器 遠破片3点
- 3 所 有 者 すさみ町
- 4 所有者住所 和歌山県西牟婁郡すさみ町周参見 4089 番地
- 5 所在の場所 すさみ町立歴史民俗資料館 (和歌山県西牟婁郡すさみ町周参見 2290 番地)

参考資料

『上ミ山古墳緊急調査概報』1972.3.25 すさみ町教育委員会 『和歌山県史 考古資料編』1983.2.25 和歌山県



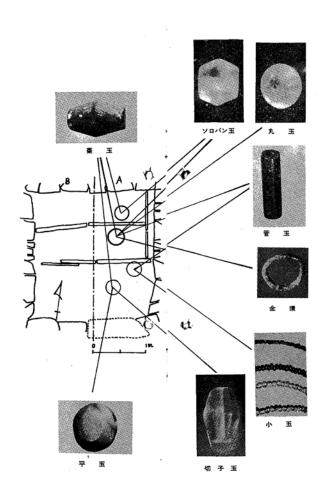
上ミ山古墳平面図



上ミ山古墳現況



上ミ山古墳玄室内仕切り石



上ミ山古墳玉類出土状況



上ミ山古墳出土遺物



上ミ山古墳出土須恵器



上ミ山古墳出土高杯



上ミ山古墳出土玉類

古墳時代の洪水で埋まった畠と水田

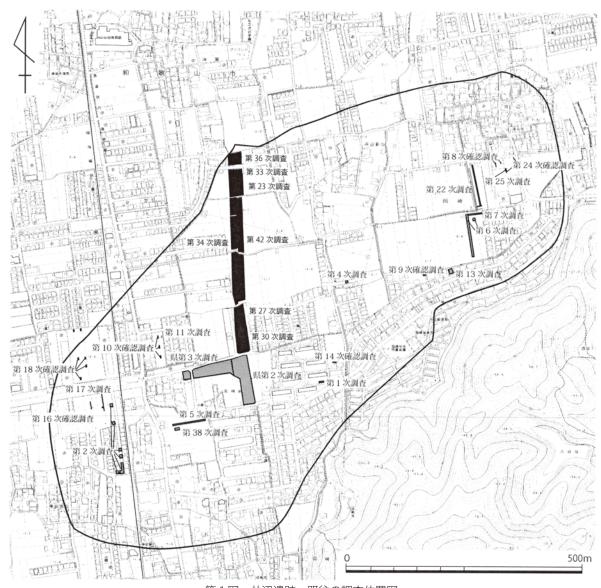
一和歌山市 井辺遺跡第36次調査・津秦Ⅱ遺跡第10次調査―

公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団 藤藪勝則

■1.井辺遺跡の発掘調査

和歌山市津秦・井辺・神前一帯に広がる井辺遺跡は、福飯ヶ峯の北西麓にあり、紀ノ川南岸平野部を北方に望む好適地に営まれた縄文時代晩期から古墳時代中期にかけての集落遺跡である。井辺遺跡では、これまでの調査によって、遺跡の東部や南部で弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物や墳墓などが多数見つかっている(第1・2図)。

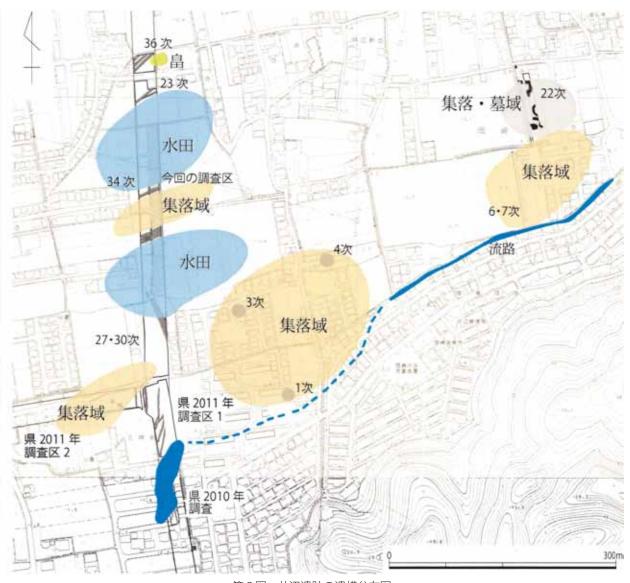
近年では、遺跡中央部を南北に貫くように松島本渡線の道路建設に伴う発掘調査が継続的に行われ、集落が営まれ始める頃の地形環境や集落内の土地利用が明らかとなり、地震痕跡としての噴砂や洪水による氾濫堆積など生活を脅かしたであろう自然災害の痕跡も確認されている。



第1図 井辺遺跡 既往の調査位置図

■2.遺跡周辺の地形環境と集落の形成

井辺遺跡では、発掘調査で見つかった地表面の起伏や集落内の遺構分布状況から、縄文時代晩期以降の地形とその経年変化、地形に合わせた土地利用の様相が明らかとなりつつある(第2図)。第34次・42次調査地点では、調査区の中央部で北東から南西方向に舌状にのびる自然堤防状の高地と、その南北に広がる低地(沼か池)が見つかった。この高地は、砂質土で形成されており、南北幅45~56 mを測るもので、その上部で縄文時代晩期の土器棺墓を検出した。よって縄文時代晩期には、調査地周辺に人々が生活を営むことができる比較的安定した高地が存在したと言える。また、高地から低地への傾斜面には、縄文時代晩期から弥生時代前期及び中期までの遺物を含む堆積層がみられた。つまり、この高地は比較的長く生活の場として利用されていたことが分かる。このような高地は、井辺遺跡の北側に隣接する津秦Ⅱ遺跡の第10次調査でも見つかっている(第3図)。



第2図 井辺遺跡の遺構分布図

この調査で見つかった高地は、同じく砂質土で形成され、幅 50 m以上を測り西側に大きく広がりをもつ。また、高地上部では弥生時代前期の遺構が検出され、傾斜面には縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物を含む堆積層がみられた。これらの調査事例から、縄文時代晩期頃の紀ノ川南岸平野部には所々に自然堤防状の高地があり、その上部に集落が営まれ始めたとみられる。

縄文時代晩期以降、高地周辺に広がる低地(沼や池)は、河川の氾濫などによって土砂が堆積し少しずつ埋没していく。そして弥生時代前期以降には、低地の地表面は上昇し離水し、乾湿を繰り返す状態が長く続いた後、後期にはほぼ埋没し長期にわたり草木が繁茂し土壌が生成される。

調査では、この低地に生成された肥沃な土壌が堆積した範囲に弥生時代後期から古墳時代前期の

水田が見つかった(写真1・2)。弥生時代以降の 井辺や津秦周辺では集落を営むうえで、低地の水田 開発も合わせて行われたと考えられる。

水田開発の時期については、痕跡としては未確認であるものの、地形の形成過程と遺物や遺構の検出状況から、調査地周辺には弥生時代前期に遡る水田が遺存している可能性がある。

■3. 古墳時代前期の畠

井辺遺跡第36次調査で見つかった古墳時代前期の畠は、洪水で押し流され堆積した黄灰色の砂質土(氾濫堆積層)によって突然埋まり、幸運にも耕作当時の姿をそのまま残していた。たとえ、洪水などの自然災害で短時間に埋没したとしても、その時の地表面を覆った氾濫堆積層が比較的薄ければ、後の時代の度重なる田起こしなどの耕作によって、埋没した畠や水田は攪乱され壊されたりする。

よって、今回の調査によって見つかった畠は、県 内でも検出例が非常に少ない遺構と言える。

畠は、南北9.5 m、東西6.0 mの範囲に広がり、さらに北東へと調査区外に続く。検出面の標高は2.5~2.6 mを測る。畠には、畝が立てられており、帯状に盛り上がる畝が13条並列し検出された(写真3)。畝が立てられているため、農作物の栽培中に埋まった可能性がある。また畝と畝との間には、上端幅で0.5~0.6 mを測る溝状の窪みが認められた。この溝状の窪みは畝間溝であり、所々底面が水平となる(写真4・5)。畠の時期は、氾濫堆積層に含まれる遺物の時期から古墳時代前期のものと考えられる。



写真 1 古墳時代前期の水田(井辺 42 次)



写真 2 古墳時代の前期の水田と中期の竪穴建物 (井辺 42 次 写真奥の低地に水田)



写真3 古墳時代前期の畠(井辺36次)



写真4 畠の畝と畝間溝(井辺36次)

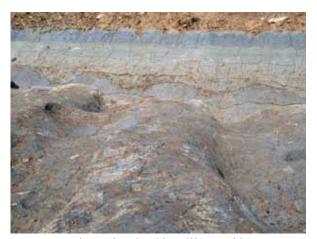


写真 5 畠の土層断面(井辺36次)

井辺遺跡では、この他に畠と考えられる畝状遺構、畝間溝とみられる平行する小溝が見つかっている(第2図、県2011年調査区1・第27・30次調査)。畠は、水田稲作以外の集落内部における食糧生産の実情について検討するための貴重な遺構と考える。

■4.津秦Ⅱ遺跡の発掘調査

津秦Ⅱ遺跡は、井辺遺跡の北部に隣接する集落遺跡であり、東西約300 m、南北約600mの範囲に広がる。これまでに9次にわたり発掘調査が行われ、少しずつ集落の始まりやその内部の様相について明らかとなりつつある。

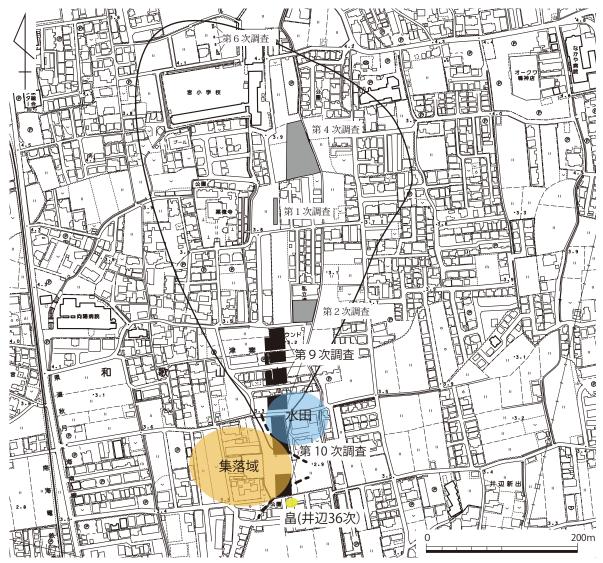
近年では、井辺遺跡と同じく松島本渡線の道路建設を契機として、遺跡南端部において広範囲に 発掘調査が行われた。その結果、縄文時代晩期以前の砂質土で形成された自然堤防状の高地と、そ の南北の両側に広がる低地を確認し、北側の低地では弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての 水田や灌漑用水路などを検出した。また、南側の低地は前述した古墳時代前期の畠が検出された井 辺遺跡第36次調査地以南に広がる(第3図)。

■ 5. 古墳時代前期の水田と灌漑用水路

津秦Ⅱ遺跡第10次調査で見つかった古墳時代前期の水田と灌漑用水路は、洪水で押し流され堆積した黄白色のシルト質土(氾濫堆積層)によって覆われていた(写真6~8)。この氾濫堆積層は、高地(居住域)と低地(生産域)を区画する2条の溝(写真9)の内部にも一定の厚さで堆積していた。よって、これらは洪水発生時、同時に機能していた遺構群と考えられる。

水田は、合計 16 区画を検出した。検出面の標高は、 $2.1 \sim 2.2 \text{ m}$ である。平面形は、長方形や正方形が多く三角形のものもある。また大きさは、一辺が $2.0 \sim 7.0 \text{ m}$ 、面積が $5.0 \sim 30.0 \text{ m}$ を測るもので小区画水田と呼ばれる形態である。畦畔は、下端部で幅 $20 \sim 50 \text{ cm}$ を測り、北東から南西方向にやや弧を描きながらのびる。これらの畦畔には、一部に途切れる部分があり水口と考えられる。さらに灌漑用水路には土堤が良好に遺存していた。

水田及び灌漑用水路、区画溝の時期は、出土遺物から古墳時代前期と考えられる。



第3図 津秦||遺跡 既往の調査位置図



写真6 古墳時代前期の水田 (津秦 || 10次)



写真7 写真6の検出状況(津秦 || 10次)



写真8 灌漑用水路土層断面(津秦川10次)



写真9 生産域を区画する溝(津秦 || 10次)

■6.まとめ

井辺遺跡や津秦Ⅱ遺跡周辺では、近年の調査において縄文時代晩期頃の地形が確認され、高地には縄文時代晩期以降、居住域が形成されることが明らかとなった。また低地は、河川の氾濫などによって土砂が堆積し、乾湿を繰り返し離水する弥生時代前期以降、集落を構成する要素のうち食糧生産を行う生産域として開発され水田などが営まれるようなる。

集落遺跡の発掘調査では、衣食住の舞台となる居住域において検出される竪穴建物や墳墓、井戸などの遺構の他、そこから出土する遺物としての土器や石器、木器などの生活用具が豊富な情報量をもつため、人々の暮らしを復元する資料として重要な位置をしめる。

しかしながら、人が集まり長期にわたり生活を営む集落には、その構成員を養うための食糧が必要であり、それを生産する場である畠や水田などの生産域も存在する。そして生産域には、灌漑用水路の掘削や堰の構築、畦畔や畝の構築、農作物の手入れなど絶え間ない労働の痕跡が残されている。これらの痕跡を調査研究することなく、人間社会の大きな関心事であり、労働力が費やされる食糧生産への理解なくして、本当の集落像を構築することはできないだろう。そういう意味で井辺遺跡や津秦 II 遺跡おいて生産域を調査確認できたことは、今後の集落研究に有益な情報を提供できるものと考える。

井辺遺跡や津秦Ⅱ遺跡を含め、その周辺遺跡の低地部分には各時代の畠や水田が良好に遺存していると思われる。それは、地形として低地に位置するため、河川氾濫よって流れ込んだ氾濫堆積層が地表面を厚く覆う可能性が高いからである。このような環境のなかでは、氾濫堆積層の特徴を把握することで、津秦Ⅱ遺跡の調査事例のように同じ災害によって埋没した遺構を特定することができる。これは言い換えれば、別々の遺構が同時に存在した証拠として氾濫堆積層を鍵層にすることで判断できるということである。そして、洪水に限らず地震痕跡なども含めた災害痕跡の範囲や規模が明確にできれば、今後起こりうる南海・東南海地震などの大規模災害への防災に役立てることができるのではないだろうか。これについては、今後の調査事例を積み重ね検討していきたい。

弥生時代の建物跡と古墳を発掘

公益財団法人和歌山県文化財センター 山本光俊

■1. はじめに

和歌山市平井所在の平井遺跡は、現在の紀ノ川河口から約5km遡った右岸の丘陵裾部に位置している。古墳時代~古代(6~9世紀)には、紀ノ川の流路が現在より北に及んでいたとされ、平安時代の文書にはこの地にあったとされる「平井津」の記述がみられるなど海運が栄えていたことが推測される場所である。東には平井Ⅱ遺跡、北には平井1号墳が隣接している。周辺には5世紀後半に築造され、馬冑(ばちゅう)や馬甲(ばこう)などの朝鮮半島との深い関わりを示す遺物が出土した国指定史跡の大谷古墳、5世紀前半~6世紀前半につくられた晒山(さらしやま)古墳群、5世紀後半~6世紀前半につくられた雨が谷古墳群、5世紀後半~7世紀につくられた鳴滝古墳群などの古墳群が位置している。また、鳴滝古墳群の北西部に位置する鳴滝遺跡では倉庫と考えられる大型掘立柱建物7棟が並んだ状態で検出されており、楠見遺跡からは初期須恵器が多量に出土している。このように、両遺跡の周辺には古墳時代の遺跡が多数存在している。

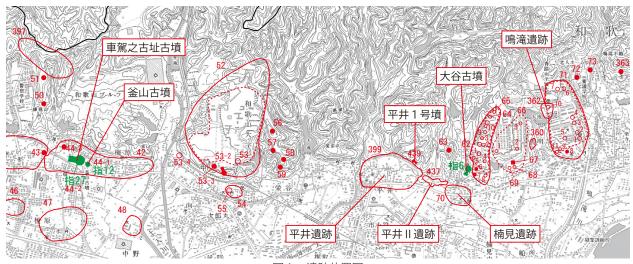


図1 遺跡位置図

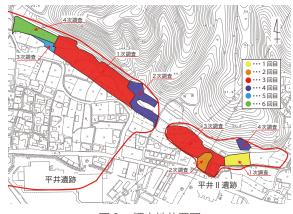


図2 調査地位置図

| | 平井遺跡 | 平井Ⅱ遺跡 | 調査面積 | |
|-------|-------------------|----------------------|--------------|--|
| 1回目 | | 第1次調査 平成24年 6~10月 | 1, 059m² | |
| | | 第2次調査 | 670m² | |
| 2回目 | | 平成25年 1~2月 | | |
| | 第1次調査 | 第3次調査 | 平井遺跡:6, 495㎡ | |
| 3回目 | 平成25年 7月~平成26年 3月 | | 平井Ⅱ遺跡:3,636㎡ | |
| | 第2次調査 | 第4次調査 | 平井遺跡:1,884m | |
| 4回目 | 平成25年 10月 | 平成25年 10月~平成26年 2月 | | |
| 5回目 | 第3次調査 | | 673m² | |
| 9回日 | 平成26年 4~7月 | | | |
| 6回目 | 第4次調査 | | 1, 685m | |
| V III | 平成26年 6~9月 | | 1, 055m | |

表 1 調査履歴一覧

■2. これまでの調査成果

一般国道26号第二阪和国道の建設工事に伴い、平井遺跡・平井II遺跡の両遺跡合わせて6回の発掘調査を行っている。工事に伴う発掘調査はすべて終了しており、現在は報告書刊行に向けて整理作業を行っている。

●平井Ⅱ遺跡(第1次調査)

古墳時代~近世の遺構を検出。古墳時代の竪穴遺構を1基検出しており、多数の初期須恵器が 出土している。組紐紋や竹管紋等を施し、南東に隣接する楠見遺跡出土の初期須恵器と共通する点 がある。また、円筒埴輪及び形象埴輪も出土している。

●平井Ⅱ遺跡(第2次調査)

古墳時代~近世の遺構を検出。古墳時代の初期須恵器、土師器、埴輪、中世の瓦器が出土している。乳状突起を付した初期須恵器の甕或いは壺の破片が2点出土しており、楠見遺跡など限られた遺跡からしか出土していない。

●平井遺跡(第1次調査)・平井Ⅱ遺跡(第3次調査)

平井遺跡では、古墳時代、奈良時代、中世の遺構を検出。特に古墳時代の遺構や遺物を多く検出した。古墳時代の遺構として調査区西端部の丘陵裾部で、後世に削平を受けた横穴式石室を検出した。また、石室から西に約12 m離れた位置で、石材が抜き取られたと考えられる石室の痕跡を検出し、両遺構の周辺から陶棺の破片が多く出土している。一方、調査区東側の丘陵裾部では、埴輪窯を2基検出した。西側の1号埴輪窯は、焼成部内部の堆積状況から3回以上焼成が行われた可能性が考えられる。 性が考えられ、約25 m東で検出した2号埴輪窯は、6回以上焼成が行われた可能性が考えられる。 埴輪窯やその周辺から多くの円筒埴輪や形象埴輪が出土している。奈良時代と中世の遺構は調査区の中央南側で、複数棟の掘立柱建物や井戸を検出した。南に広がる状況を示しているため、この方向に建物群が広がることが推定される。

平井Ⅱ遺跡では、古墳時代と中世の遺構を検出。古墳時代の遺構として土坑、柵列、掘立柱建物

などを検出した。また、調査区の東端で検出した土坑からは、 初期須恵器と考えられる高坏の坏部が出土しており、5世紀 前半の時期と考えられる。中世の遺構として井戸、木組み遺構、 鋤溝状遺構などを検出した。

●平井遺跡(第2次調査)·平井||遺跡(第4次調査)

平井遺跡では、奈良時代と中世の遺構を検出。奈良時代の土坑からは、古墳時代と奈良時代の遺物が混在した状態で出土した。中世の土坑からは、瓦器椀を正位に置き、その上から伏せた状態の瓦器椀が出土した。中には何も入ってなかったが、五穀あるいはその類のものを入れて地鎮を行った遺構と考えられる。また、調査区中央に存在していたため池の堤の下から、江戸時代のものと考えられる底樋(池の排水施設)を約9m検出している。排水管として利用されたと考えられる。

平井 II 遺跡では、古墳時代と中世の遺構を検出。古墳時代の土坑からは埴輪が出土している。



写真 1 横穴式石室(平井遺跡)

■3.平井遺跡(第3次調査)の成果

平成26年4月~7月にかけて、673㎡を対象として調査を行った。調査地は東西2ヶ所に分かれ、 西側調査地は、1次調査の西に位置し、弥生時代と中世の遺構を検出した。

弥生時代の遺構として、竪穴建物、土坑、方形周溝墓を検出した。

竪穴建物は、33 竪穴建物と 44 竪穴建物の 2 棟を検出した。33 竪穴建物は、やや隅円気味の円形を呈し、北及び南端は調査区外となる。規模は $4.4 \sim 4.6$ mで、深さは 15cm前後である。中央に直径 1.0 m、深さ 35cm程の土坑があり、その両側の相対する位置に直径 10cm、深さ 30cm以上の 2つの小穴を設けた、いわゆる松菊里型住居である。44 竪穴建物は、全体の約 1/2 弱は調査区外である。平面形は円形で、同心円状に 1 回の拡張を行っている。規模は、拡張前が 4.1 m、拡張後は約 5.0 mである。深さは残りの良い範囲で 10cm前後である。

土坑は、1土坑と44竪穴建物の東側で検出した大型の59土坑がある。1土坑は、平面の形態は不整形で、底面も段差を有し、遺構肩部の立ち上がりも緩やかである。完形に近い弥生土器や石包丁が出土しており、竪穴建物であることも考えられる。59土坑は、平面形は楕円形、断面は擂鉢状を呈する。規模は2.6~3.0 m、深さは最大1.1 mである。完形品を含む弥生土器が出土する他、木器の未製品や獣骨が出土している。

方形周溝墓は調査地東端部で検出した。2方形周溝墓の北辺溝の一部は調査区外となる。規模は東西 10.4 m×南北 8.6 m、周溝の幅は 0.7 ~ 1.9 mと場所により異なり、断面形は逆台形及び逆三角形を呈する。北東部に陸橋部を有する。墳丘は長方形で規模は 8.8 m× 7.6 mである。盛土は削平されており、埋葬施設は遺存していない。周溝からは完形品を含む弥生土器が多数出土している。

中世の遺構は、溝とピットを検出しているが、近世以降に削平を受けたためか、遺構密度は希薄であった。

東側調査地は、1次調査において調査を行った2号埴輪窯において、剥ぎ取り保存作業と窯構築面(操業開始面)までの調査を行った。1次調査では、剥ぎ取り保存に備えて、床面5上で調査を中断した。今回の剥ぎ取りは床面5の窯体部から灰原までの外縁を含めた範囲の剥ぎ取り保存を実施した。剥ぎ取り保存作業後には、窯構築面(操業開始面)である床面6上まで調査を行った。調査終了後は、西側にある1号埴輪窯を含めた範囲を現地保存するため、砂による埋戻しとシート養生作業を行った。



写真 2 33 竪穴建物全景



写真 3 44 竪穴建物全景



写真 4 1 土坑全景



写真6 2方形周溝墓全景



写真7 2号埴輪窯剥ぎ取り保存



写真 5 59 土坑木製品出土状況

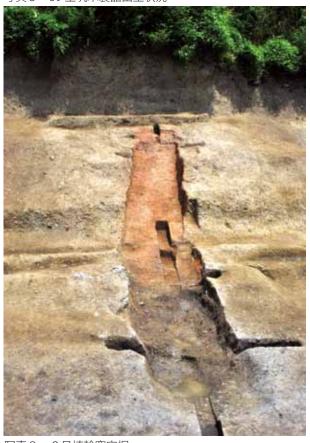


写真8 2号埴輪窯完掘

■4.平井遺跡(第4次調査)の成果

平成26年6月~9月にかけて、1,685㎡を対象として調査を行った。弥生時代、古墳時代、古代~中世の遺構を検出した。

弥生時代の遺構として、竪穴建物、土坑、溝、ピットを検出した。

42 竪穴建物と 61 竪穴建物は重複関係にあり、42 竪穴建物が新しい。42 竪穴建物は 2 回拡張を行っていると考えられるが、土層断面では別の竪穴と重複している可能性も考えられる。42 竪穴建物の規模は、当初が $2.2\sim2.4~\mathrm{m}$ 、1 回目の拡張で $3.0~\mathrm{m}$ 、2 回目の拡張で $3.3\sim3.4~\mathrm{m}$ 。深さは $20\sim30$ cm前後である。中央に深さ約 50cmの楕円形の土坑があり、その両側の相対する位置に直径 $10\sim20$ cm・深さ 10cm前後の 2つの小穴を設けた、いわゆる松菊里型住居である。61 竪

穴建物の規模は、 $2.6 \sim 2.7 \,\mathrm{m}$ 。深さは $20 \sim 30 \,\mathrm{cm}$ 前後である。 $114 \cdot 117 \,\mathrm{E}$ ア建物は重複関係にあり、 $114 \,\mathrm{E}$ 欠建物が新しい。 $114 \,\mathrm{E}$ 欠の全体の約 $1/4 \,\mathrm{L}$ 調査区外に延びる。平面形は円形で、規模は約 $4.0 \,\mathrm{m}$ 、深さは $20 \,\mathrm{cm}$ 前後である。 $117 \,\mathrm{E}$ 欠は、一部しか残存していないが、拡張を $1 \,\mathrm{E}$ 行っていたことが確認できる。 $136 \,\mathrm{E}$ 欠建物は、中央部を水田に伴う用水路で破壊されている。やや歪であるが円形を呈し、規模は約 $3.0 \,\mathrm{m}$ 前後、深さは最大約 $10 \,\mathrm{cm}$ が遺存している。

古墳時代の遺構として、横穴式石室、土坑を検出した。

横穴式石室は、63 横穴式石室と、南東方向に約23 m離れた場所で85 横穴式石室の2基を検出した。63 横穴式石室は、南西に開口する両袖式の横穴式石室である。玄室と羨道の基底部の石1~2段分のみ残存する。玄室の規模は、長さ2.5 m、幅1.4 m。羨道は、幅0.8~0.9 mで、長さは2.0 mを検出し、玄室の主軸方位よりやや東に振る。玄室と羨道の中央部に10㎝前後の小礫を使用した排水溝を設けている。石室の石材は、70㎝×50㎝前後の大型のものが多く、玄室では長辺を縦方向に使用しているものが多くみられる。墓壙は、幅2.4~2.8 m前後で、玄室は中心からやや左寄りに構築している。出土遺物は、完形の須恵器や土師器のほか、銅芯に銀箔を施した耳環が1点出土している。85 横穴式石室は、南西に開口する両袖式の横穴式石室である。63 横穴式石室と同様に玄室と羨道の基底部の石1~2段分のみが残存する。玄室の規模は、長さ2.2 m、幅1.4 m。羨道は、幅0.8 mで、長さ1.4 m分を検出した。羨道の中央部に10㎝前後の小礫を使用した排水溝を設けている。玄室は、63 横穴式石室と同じく大型の石材を使用し、最も規模の大きな石材は1.3 m×1.0 m前後で、数点は長辺を縦方向に使用している。墓壙は、幅2.8~3.0 m前後で、石室はほぼ中央に構築している。遺物は、完形の須恵器や土師器が複数点出土しているほか、羨道から銅芯に金箔を施した耳環が1点出土した。また、玄室中央部の左側壁側で頭部と脚部の一部と思われる人骨が出土している。

11 土坑は、明瞭な掘形などは無く、最大 1.6 mの礫石が散乱した状態で検出された。北東部で石室の一部と考えられる石列があることから、破壊された残骸の可能性がある。

古代~中世の遺構として、柱穴、土坑、溝を検出した。63 横穴式石室の玄室左側壁の側石上で中世の土師器皿群を検出した。完形で10点前後出土し、皿2枚の口縁部を上下に合わせた状態で検出されたことから、地鎮等何らかの祭祀行為に伴うものと思われる。

■ 5. まとめ

平井遺跡の第3・4次調査では、弥生時代の竪穴建物7棟と古墳時代の横穴式石室2基を検出した。竪穴建物の時期は、3次調査の2棟は弥生時細中期中葉、4次調査の5棟は若干新しく中期後葉から後期前葉と考えられる。横穴式石室の時期は、63横穴式石室が6世紀中葉、85横穴式石室が6世紀後葉から7世紀初頭と考えられる。横穴式石室は1次調査で1基を検出し、また、石材が抜き取られたと考えられる土坑状の遺構1基が確認されている。4次調査の2基と合わせると4基の古墳に伴う石室の存在が明らかとなり、平成25年に発見された平井1号墳を含め、これまで古墳が確認されていなかった平井地域において、5基の古墳が発見された。4基の古墳に伴う石室は上部が削平されていたことを考えれば、周辺でも数基の古墳が存在していたと想定される。

発掘調査は終了しているが、6月から整理作業が始まっており、新たな成果が得られることを期待したい。



写真 9 42・61 竪穴建物



写真 10 114·117 竪穴建物



写真 11 136 竪穴建物



写真 12 63 横穴式石室



写真 13 85 横穴式石室



写真 14 中世の土師器皿群

荘園開発の拠点?寺院跡の発掘

一和歌山市 木ノ本Ⅲ遺跡第 12 次調査一

公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団 菊井佳弥

調査所在地:和歌山市木ノ本 656-1他

調査期間:平成26年10月1日~平成27年1月16日

調査面積:527㎡

調 査 原 因:分譲住宅建設に付帯する道路工事

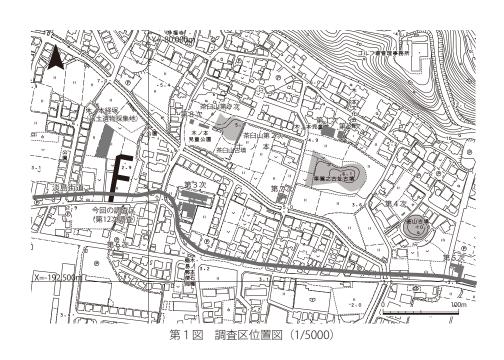
主 な 時 代: 平安時代後期から鎌倉時代

主な遺構:寺域を区画する溝、焼成土坑、井戸

主 な 遺 物:瓦、瓦器椀、土師器皿、製塩土器、石造物

木ノ本Ⅲ遺跡は、和泉山脈の南麓の東西に細長く伸びる緩斜面上に立地する。南に低くなる緩斜面地は、国土地理院の土地条件図では、海成による砂堆ないし、砂州に分類され、縄文時代に堆積した砂により形成されている。傾斜地は、東側の土入川へ向かって、西から東へも緩やかに低くなる。車駕之古址古墳をはじめとする木ノ本古墳群が所在しており、安定した地盤であったといえる。周辺の既往調査では、井戸や集石遺構、石垣、礎石、溝等の中世遺構が多くみつかり、集落が形成されていたことがわかっている。また。調査区北西の水田には、耕作中に須恵質壺と瓦質壺、和鏡が採集されている木ノ本経塚が所在する。

今回の調査地は緩斜面の先端に位置し、南側は宅地化が進行し、地形が分かりにくくなっているが、調査地とは約0.6 mの比高差がある低地が広がっている。古代の幹線道路である南海道の位置は、研究者により諸説あるが、調査地のすぐ南側を通る近世の淡路街道も候補のひとつである。

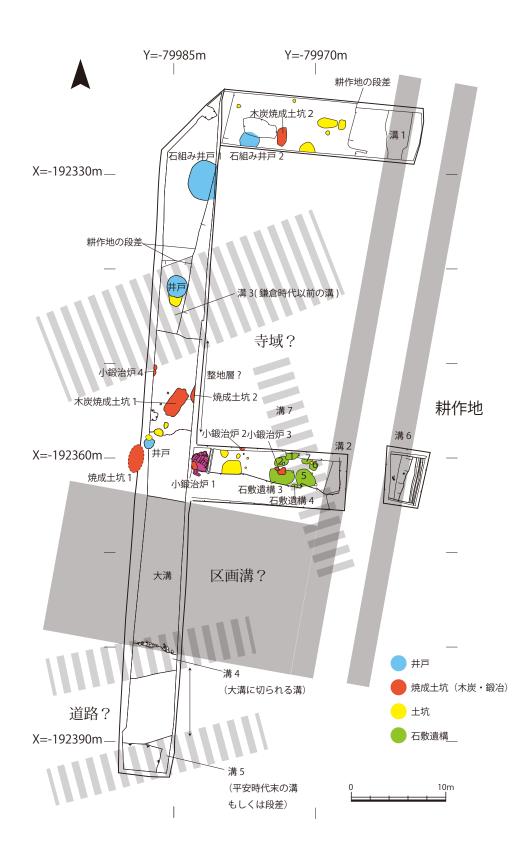


今回の調査では、鎌倉時代の瓦が多く廃棄された東西方向の大溝と南北方向の溝 1・2・6がみつかった。大溝の南岸は人頭大の石で護岸されていた。溝 1・2は埋土等の状況から同一の溝で、溝 6は溝 1・2より時期が古く、溝 1・2の前身の溝である。これらの溝に区画された範囲では、石組み井戸 2 基や小鍛治炉 4 基や木炭焼成土坑 2 基、ロストル式の小型窯 1 基、焼成土坑 2 基、石敷遺構 6 基、土坑やピットを検出した。調査区中央付近では厚さ 1 m以上の整地に伴う盛土層を検出した。溝 6 の東側では同時期の耕作痕を検出している。

周辺の調査でも鎌倉時代の瓦が出土しており、以前から調査区付近に寺院が存在すると推測されていたが、今回の調査地では大溝と溝1・2・6、これらの溝に区画された範囲で検出した遺構や包含層から多くの瓦が出土した。溝6の東側や大溝の南側は、耕作溝が検出されており、耕作地であった。溝6の東側は瓦が出土しておらず、大溝の南側は少量の瓦が出土しているが、北側と比べて出土量は明確に減少する。大溝と溝1・2・6に区画された内外では瓦の出土量に明らかな差がある。出土瓦に古代末から鎌倉時代の寺院で用いられる梵字を施した軒丸瓦が含まれ、調査地北西には木ノ本経塚が存在することから、大溝と溝1・2・6は区画溝であり、区画内は寺域にあたる。また、井戸や焼成土坑が複数みつかっていることから、寺院に付属する工房であったと考える。出土瓦には梵字(キリーク)文、八葉文、巴文の軒丸瓦、連珠文、均衡唐草文の軒平瓦、鬼瓦があり、そのほかの出土遺物には、瓦器椀、土師器小皿、組み合わせの五輪塔の一部と思われる凝灰岩製の石造物や蓮華が陰刻された砂岩製の石造物がある。溝6からは一般集落ではあまり出土しない大型銭の崇寧重寶(初鋳1103年)と大観通寶(初鋳1107年)の2枚の北宋銭が重なって溝東側の斜面で縦に刺さった状態で出土した。

今回の調査の出土遺物は13世紀半ばまでの土器に限られることから、この時期に寺院が廃絶したと考える。湧水が激しく、大溝や整地盛土層を完掘できなかったので、建立時期については不明である。整地に伴う盛土層は少なくとも2時期あり、2時期の盛土の間で検出した溝7からは12世紀前半の瓦器椀が出土した。少なくとも12世紀前半以前に建立されたと考える。大溝に先行する溝4を粘土ブロックで埋め立てられえていたが、その中から平安時代の製塩土器が1個体出土した。埋め立てが大溝掘削に際して行われたものであれば、平安時代に遡る寺院である可能性がある。また、大溝や溝1・2・6に先行する溝3・4・5は、北東-南西方向に平行して流れ、寺域の区画と方向が異なる。寺院廃絶後の耕作溝の方向や現行地割は、寺院を区画する溝と同じ方向で、寺院建立の前後では地割が大きく変更されていることから、寺院がこの地の水田開発に関わっている可能性が考えられる。

最後に、溝4と溝5の間は、幅約7mの空間地となり、鎌倉時代にはすぐ北側に寺院があり、推定南海道や淡路街道に隣接し、調査地の南側が低地となる扇状地の先端に立地していることから、平行する2本の溝に挟まれた空間地は、道路である可能性を考えられる。しかし、道路と断定するには、通行痕跡や路面の硬化を検出する必要があるが、今回は検出できていない。道路と認定するには、継続的な調査と道路の可能性を考えての調査が必要であり、今回の調査では可能性を指摘し、今後の南海道の調査につなげていきたいと考える。



第2図 遺構配置図 (1/400)



大溝 (北東から)



大溝出土梵字瓦(南から)



大溝南側溝4検出状況(北から)



木炭焼成土坑1(北東から)



石組み井戸2(北から)

川の下を潜る用水路

--橋本市 出塔の水道の発掘調査--

公益財団法人和歌山県文化財センター 村田 弘

■ 1. はじめに

出塔の水道は、橋本市北西部、出塔に所在する。この辺りは、大阪府との県境を成して東西にのびる和泉山地の南麓裾部に当たっており、その裾部を切り込む谷筋から小河川が南流し、小規模な扇状地を作り出している。出塔の水道もこうした扇状地上に位置している。

出塔の水道は、図1の概念図に示すように、扇状地を流れる山田川の左岸(北側)にある取水地から右岸の出水口まで、ほぼ川に直交するかたちでその下を潜らせている暗渠構造の水利施設である。古くは周辺の人々の生活用水としても利用されていたようであるが、主な目的は下流に位置する柏原地区への灌漑用水であった。その水量が豊かであったようで、「山田川の水が涸れても、出塔の水は涸れん」と地元では言われつづけている。また、伝承としてではあるが柏原地区の南側に所在する銭坂城を拠点に室町〜戦国時代に活動した生地石見守俊澄がお城の生活用水を得るために造らせたとも言われている。今回、山田川の砂防工事に伴って、はじめてこの"出塔の水道"の発



写真1 調査地遠景(北上空から)

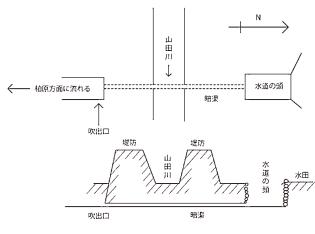


図1 出塔の水道概念図

掘調査を実施する機会を得、その構造や築造 時期を明らかにすることができた。以下、そ の調査成果について詳述する。

■ 2. 調査の成果

現在の河床から80cmほど、河川堆積土である円礫混じりの粗砂層を掘り下げたところで、ほぼ川と直交する幅2.2 m、長さ5.5 mにわたって礫が充填されている溝を検出した。礫の大きさは、15~40cm大を測り、整然とした並びは認められず、粗密差があり、全体としては投げ込まれたような状況であった。これが出塔の水道の上部構造をなす礫群と判断した。また、この礫群の東側肩部に沿って幅50cm前後の黄色の粘土層が施されているのも検出した。東側のみであり、西側にはまったく施されておらず、このことから、この黄色の粘土層については、東側に水が漏れていかないようにする遮水層としての役割を担っていたものと考えられた。

この礫層の検出状況を記録にとどめたの ち、徐々に礫を取り除き、掘り下げを行った。



写真2 上層部礫検出状況(北から)



写真3 水道蓋石架橋状況(北から)



写真4 水道蓋石除去状況(北から)

その結果、 $60 \sim 70$ c m下がったところ、標高 138.8 m前後で、これまでの礫とは異なる $40 \sim 60$ cm 大の横長の礫を整然と並べているのが確認された。結論的に言えば、これらの礫は、出塔の水道の中心部にある暗渠排水溝上に架橋した蓋石であった。

この蓋石は、側石に直接架けている場合と高さの調整のためか小振りで扁平な石を一枚間にかまして架橋している場合が認められた。側石との取り付き及び蓋石どうしの取り付き状態を見ると、かならずしも密封された状態ではなくわずかに隙間があり、径3cm以上の小石などは入り込まないものの水が流入するには十分な隙間といえる。このことからも上部構造と考えられる礫群の間を縫って流れてきた水は、こうした隙間からも取り入れられていたのであろうし、むしろそのことを意図した造作であった可能性が考えられよう。

溝本体の大きさは、幅30cm、高さ 15cm ほどである。側石は基本的には一 段で、長さ 40 ~ 60cm、高さ 15cm 大 ほどの石が用いられていたが、一部高さ の足らない場所ではやや小振りの石をも う一段積んでいた。底部には石は認めら れず、漏水防止のため後述する粘土が敷 かれているようであった。東側に施され た粘土は、上部構造をなす礫群の高さ にあわせて設けられており、礫群及び 暗渠溝に沿うあたりでは、基底部から 130cm ほどの厚さがあるが、東側、水 道の本体部から離れるにつれ、その厚さ を減じ、1 mほど離れたところではその 厚さは 30cm ほどとなっていることを確 認した。

■3. ま と め

ここでは出塔の水道の構造、その築造時期についてまとめておきたい。

出塔の水道を構成する要素としては、①上部構造となる礫群、②水を流すための石組溝、③漏水防止及び遮水層としての黄色の粘土帯の三つがあげられる。

このうち②と③については、文字どおりのものであるが、①の礫群については、下に設けられた石組の溝を擁護するだけではなく、西側から伏流してくる水を受け止め本体の石組み溝に導く、それと



写真5 水道流水状況(南から)

ともにそれ自体も水を流す役割が大きかったものと思われる。実際、調査の中でこの礫群の中をかなりの水が浸透して流れていたことを確認している。

造り方としては、まず全体を収める幅4mほどのU字状の溝を掘り、ついでその東側及び溝の底部となる箇所に黄色粘土を充填する。その後蓋石を伴う石組の溝を構築し、その上に厚さ1m近く数多くの礫を投げ入れ、最後に当初掘り上げた土を覆いかぶせて仕上げたものと推察できる。

築造時期については遺物が少なく、かつ取り入れ口付近の石垣の裏込めからの出土と言う担保すべき条件があるものの、これより古い時期のものや逆に新しい時期のものがまったく出土していないことを考慮すれば現段階では概ね江戸時代中期後半、18世紀後半から末にかけて造られたものと判断している。

なお、改修や補修については調査途中に留意したつもりであるが、その痕跡は見出すことができなかった。築造以来 250 年余り途絶えることなく機能したことを考えるとその技術力の高さが想像できよう。

「山田川の水が涸れても出塔の水は涸れることがない」とは、ながく地元で言われつづけた言葉であるが、実際調査の期間中、山田川の水量が乏しくなっているのを何度も見かけたにもかかわらず、出塔の水道からは常に一定量の水が流れ出ていた。

こうした安定した水の供給は当時の人々にとっては切実な願いであったであろうし、それを支えたのは先人の努力となによりも今回の調査で確認することができたその技術力の高さであったと言えよう。その意味では「出塔の水道」はこの地域の人々にとって貴重な文化遺産であるとも言えよう。

寺院造営集団の居宅?

―海南市 木津遺跡の発掘調査―

公益財団法人和歌山県文化財センター 小林充貴

■ 1. はじめに

木津遺跡は海南市木津に所在し、貴志川左岸の 段丘に広がる遺跡である(図1)。

過去に瓦が出土していることから室町時代の寺 院跡とみられていたが、発掘調査が実施されてい なかったため、詳細は不明であった。

今回の発掘調査は国道 424 号の道路改良工事に伴うもので、南北に延びる段丘の東側斜面にあたる面積 2,389㎡について平成 26 年 12 月から平成27 年 2 月まで実施した。調査区の現況は、田、畑である。

中野上小学校 中野上小学校 大津遺跡 今回の調査地

図1 木津遺跡の調査地位置図

■ 2. 調査区

調査区は1区と2区に分かれ、北側が1区、南側が2区となる。ともに調査区内に東西で0.5~0.8mの段差があり、西側は東側よりも標高が高く

遺構の密度が高くなっている。また、北に向かって下る傾斜になっていて、西側の最も高い部分は標高約69mである。東側は地山まで削平を受けており、遺構の密度も低い。南側でも遺構の密度は低いが、東側に落込み遺構があり、遺物包含層が堆積している。遺物包含層は他に調査区北端、中央部西側にも堆積している。



写真1 調査区全景写真(モザイク合成写真)(左側が北)

■3.調査成果の概要

今回の調査では、溝や土坑、通路 状の遺構などが検出されたが、とり わけ注目されるのが複数の掘立柱建 物跡である。

遺物は瓦、土師質土器、瓦器、青磁、国産陶器、金属製品などが出土 している。

掘立柱建物跡の柱穴には、柱が 地中に沈みこむのを防ぐための礎 板の役目を持つ据え石がみられる もの(写真3)もあり、それらを含 む柱穴の配置状況から少なくとも7 棟以上の建物があったと考えられる (写真2)。

但し、これらの柱穴のいくつかは 重複していることから、すべての建 物が同時期に存在していたのではな く、2ないし3回の建て替えを行っ



写真 2 掘立柱建物跡 1~7 航空写真(下が北)

ていたものである。建物を構成する柱穴の中の埋土に焼土や炭を混入するものが確認できた。

調査区南端で、東西に平行に延びる幅約 30cm の 2 条の溝状遺構に挟まれた幅 1.5m 程度の平面を検出した(写真 4)。これらの溝状遺構に挟まれた部分には硬く締まった箇所(硬化面)が認められ、露出した地山の礫の表面は著しい磨滅が確認された。このことより、通路もしくは道路であった可能性が考えられる。但し、通路状遺構と掘立柱建物跡の軸線が一致しないことから、異なる段階の遺構と考えられる。

また、硬化面上や溝状遺構内には炭化物と共に礫や瓦片等の遺物が集中して出土した。柱穴の埋土の焼土や炭の混入からも火災があった可能性もある。



写真 3 柱穴内据え石(建物 6)



写真4 通路状遺構(西から)

■ 4. まとめ

今回の発掘調査では鎌倉時代以降とみられる 土器類(写真6、7)や瓦(写真8、9)が出土した。 瓦は調査区の北端、南端、中央部西側の3箇所 で大量に出土したが、完形品はなく、いずれも 廃棄されたものと考えられる(写真5)。

瓦(写真 8、9)は $13 \sim 14$ 世紀のものが主体を占め、この時期の瓦葺きの建物の存在が考えられるが、瓦葺きの建物に伴うはずの礎石は今回の調査では確認できず、後世の削平を受けたか、もしくは、調査区外に存在する可能性がある。

これらのことから、瓦の出土は近辺に瓦葺 きの建物が存在していたことを示唆するもので ある。

掘立柱建物跡などの遺構は調査区西側に集中しており、他の箇所は密度が低いことから遺構は段丘上の高い場所(南西方向)に展開していくものと想定される。

鎌倉時代において瓦が使用される建物は、 有力武士等の居館或いは寺院に限られることか ら、こういった施設に関わる可能性が高いと考 えられるが、今回の調査地付近に寺院などが存 在した記録は、文献に残されていない。

しかし、近隣には岡殿屋敷跡や中殿土居跡 等中世の遺跡も所在し、その関連性を窺わせる。

今後、本遺跡の遺構や遺物の帰属時期について更に詳細な検討が必要である。



写真8 軒平瓦



写真 5 調査区北端 瓦溜り(南から)



写真6 陶器出土状況(西から)



写真7 柱穴瓦器椀出土状況(東から)



写真 9 軒丸瓦

鷺森御坊の戦国末期惣堀と橋梁遺構

一和歌山市 鷺ノ森遺跡第13次調査成果から一

公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団 井馬好英・西村 歩

■ 1. はじめに

鷺ノ森遺跡は、紀ノ川下流域南岸、和歌山平野のほぼ中央部に位置し、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。この遺跡は、国指定史跡である和歌山城の北約500mに位置する浄土真宗西本願寺派の鷺森別院周辺に所在する。本願寺鷺森別院は、浄土真宗の紀州門徒による道場として永禄6(1563)年に和歌浦弥勒寺山(御坊山)から宇治郷鷺森に移転し、寺格を整えて鷺森御坊と呼ばれるようになった。一方、大坂本願寺で織田信長と交戦中であった第十一代門主の顕如は、形勢不利とみた天正8(1580)年に信長に講和を申し立て大坂本願寺から鷺森御坊に退去し、御坊は鷺森本願寺となった。その後、顕如は天正11(1583)年に泉州の貝塚(貝塚本願寺)に移り、鷺森本願寺は本願寺鷺森別院と呼ばれるようになった。

平成27年1月18日に現地説明会で一般公開を行った戦国時代の堀跡は、鷺森本願寺の頃には既に存在していたものと考えられ、寺内の四周に廻らされていた堀の一部と考えられる。堀南肩部の一部には北側に張り出す部分があり、またその堀肩部には直径1.4m、深さ65cm程度の土坑2基(土坑1266・1326)が検出され、内1基には基底部に長さ60cm、幅20cm、厚さ10cmの板材が埋設されていた。さらに、検出された地点が後世の江戸時代から太平洋戦争末期の和歌山大空襲直前まで道路として使用されていた部分であり、このことを踏まえると鷺森本願寺に通じる道路の南入口に架けられた橋もしくは門に関係する遺構と考えられ、この時点で橋梁遺構の存在を示唆していた。

■2. 調査成果

現地説明会時点で橋脚部分の上部は太平洋戦争以前に存在した道路中央部に埋設されたコンクリート製のマンホールによって不明瞭となっていた。その後、第13次調査における下層調査を終了した後、マンホールの撤去を行い、開発区域に限り調査区を拡張して橋梁遺構の確認を行った。

まず検出された戦国時代の堀は、やや屈曲して東西方向にのびるもので、堀幅は 15 ~ 16 m、 検出面からの深さが 2 m程度の大規模なもので、南肩部にのみテラス状の平坦面を形成している。 堀の堆積は大きく 3 単位に分けられ、堀としての機能を有していた最下層の堆積土には 15 世紀後 葉に位置づけられる中国製染付・白磁の碗・皿や備前焼などの国産陶器のほか、鎧の一部である小 札片、鉛製の鉄砲玉、小刀などが出土した。

今回マンホールの撤去後追加調査を進めた橋脚部分は、堀南肩部から3m程度の範囲であり、江戸時代以降の道路直下にあたる。確認した遺構は、並列する橋脚の一部と考えられる下端を鈍く尖らせた円柱状の丸太杭4本(直径30cm程度)2列分で、ともに内側に傾斜した「ハ」の字状(傾斜角74~77°)に構築され、最大で堀底から1.6 mの高さまで遺存していた。また肩部の斜面に沿って直径20~30cm程度の砂岩河原石などを使用して橋脚基部を固定する状況が確認され、石材の一部には一石五輪塔1基も含まれていた。また橋脚には橋桁を繋ぐとみられる柄孔も確認された。

この状況から、橋梁の規模は基底部で幅約 3.0 m程度、 1 列から 2 列目の長さは 2.5 m程度であ

り、復元すると橋幅 2.0 m以上であったものとみられる。また橋脚基底部の堆積土から新たに鉄製の矢 先が出土した。

■3.まとめ

今回の追加調査で明らかとなった橋梁遺構は、鷺森本願寺当時裏門(南門)に向かって堀を横断するように直線的に構築されたもので、当然寺内側にあたる部分には土塁が廻らされていたと考えると今回の調

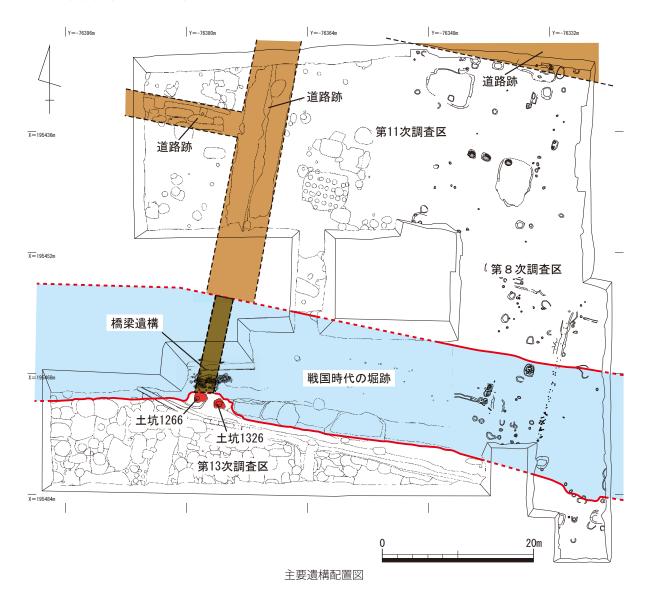


橋梁遺構 (南から)

査対象地外である堀北肩部には門が構築されていた可能性が考えられる。また今回検出した橋梁施設は裏門にあたる部分であり、当時の正門であった東側にも橋梁施設が存在したものと考えられよう。

【参考文献】

鷺ノ森遺跡(第13次)発掘調査現地説明会資料 和歌山市教育委員会・(公財) 和歌山市文化スポーツ振興財団 2015年



和歌山城二の丸大奥・裏庭等の発掘調査

一和歌山市 史跡和歌山城第37次調査—

公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団 北野隆亮

■1. はじめに

史跡和歌山城の発掘調査は 1981年に行われた一の橋大手 門再建工事に伴う調査を手始め に、現在では35年目・37次 調査にまで至っており、多くの 考古学的な知見が得られ、これ まで和歌山城の石垣の修復や御 橋廊下などをはじめとする復元 整備に役立っている。今回は、 二の丸西部(大奥)において、 平成26年度に行った第37次 調査の概要を報告する。



■2.調査の成果

発掘調査を実施した和歌山城二の丸西部は、建物配置などを描いた江戸時代後期の絵図「和歌山二ノ丸大奥当時御有姿之図」が残されており、その絵図をもとに、ある程度遺構を推定しながら調査を進めた。今回の調査は、大奥の裏庭など3カ所(第1~3区)に調査区を設定した。

調査の結果、実際に絵図と合致する大奥の江戸時代後~末期の遺構を確認した。遺構は、穴蔵1基、水琴窟1基、根石1基、石組井戸1基、玉石敷1箇所、土塀基礎1条、礎石列1条(礎石4基)を検出した。これらの遺構は、全て絵図に描かれた施設に関連するものと推定した。

■3. 主な検出遺構

水琴窟 この遺構は、直径約50mの土坑の中に 堺焼擂鉢を逆の位置に埋設したもので、遺構上部 が削平を受け、擂鉢の底部を欠失した状態で検出 した。土坑は堺焼擂鉢を設置した後、直径5cm程度の玉石を多量に含む土で埋め戻していた。



第1区 全景(南方向から撮影)



第1区 水琴窟

穴蔵 石組の地下室で、幅 1.8 m、長さ 4.6 m以上、深さ 2.3 mを測る大規模なもので、床面に緑色片岩の板石を敷き詰め、側壁は砂岩の切石を用いて構築している。最上部の石材が北西隅部分に北壁と西壁に各 1 点ずつ残されており、西面の最上部石材はその下の石材に比べ西に 10cm寄せられており、その下の石材上面に天板を受ける構造を推定することができる。また、石組に漆喰を用いて補強・修理した痕跡が一部残存していた。この遺構は、絵図にみえる「御数寄屋」前の垣根で囲まれた「茶庭」の外、奥庭の空閑地にある「穴蔵」に相当するものと考えられる。

石組井戸 コンクリート製の板で蓋をして埋め戻さ れていたため井戸内部は江戸時代の旧状を良好に保 っており、現在においても水が湧きだし井戸として 機能していた。内径90cm、深さ7.0mを測るもので、 内部の石組みは、上から 1.8 mの範囲が砂岩切石を 密に積んでおり、この範囲は下に行くほど口径が広 がる。その下は上部と様相が異なり、内径は約1.2 m均一で、砂岩の自然石を主体に積んでおり、緑色 片岩の割石も少量用いている。井戸の地表面は、砂 岩の石材を板状に加工して並べ、一辺 2.6 mの正方 形の範囲を石貼りとしており、石貼りの一部に漆喰 で補修した痕跡がみられる。石組井戸内部の石組み について、上下で石材や形状が異なる原因としては 古い段階(浅野期?)からあった井戸を、地面をか さ上げする時(浅野~徳川移行期・二の丸西側堀埋 立時?)に積み足した可能性が考えられる。

■4.調査の意義

今回の発掘調査では、和歌山城二の丸西部の大 奥諸施設に対応する徳川期の遺構を確認することが できた。特に、穴蔵と石組井戸は石造の大規模なも のであることが判明し、絵図や文書から知ることの できない地下構造を明らかにした。また、絵図に大 奥と中奥の境界として描かれた土塀を遺構として検 出し、大奥と中奥の境界を初めて明確にするなど、 基本資料を追加することができた。



第1区 穴蔵(石組の地下室)



第3区 石組井戸・玉石敷・土塀基礎・礎石列



第3区 石組井戸



第3区 石組井戸内部

和歌山県内最古の水田調査

一和歌山市 太田・黒田遺跡第 78 次調査―

公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団 菊井佳弥

調査期間 2013年11月26日~2014年3月14日

調查原因 集合住宅建設

調 査 地 和歌山市太田一丁目 11 番5・6・7・8・11・12

調査面積 780㎡

主な遺構 弥生時代前期から中期前半の水田、溝

弥生時代中期後半の方形周溝墓、土坑墓 3 基、土器棺 1 基、溝 古墳時代前期の溝、古墳時代後期から飛鳥時代の溝、耕作痕

中世の耕作区画

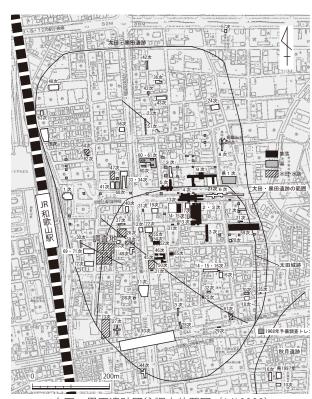
主な遺物 弥生土器、銅鐸形土製品、土師器、須恵器、瓦器

太田・黒田遺跡は、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡であり、弥生時代前期から中期の和歌山県内屈指の大規模集落遺跡として知られる。紀ノ川の旧流路である大門川・和歌川が遺跡の北側、西側を大きく取り囲む標高 4.0 m前後の沖積氾濫原に立地する。遺跡の南東が高く、北西方向へ低くなる。東西約 500 m、南北約 850 mの範囲で、現在までに約 80 次の調査がおこなわれている。

第78次調査は太田・黒田の弥生時代前期から中期の集落の西側に広がるとされる水田域を調査

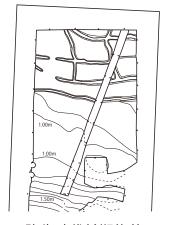
した。その結果、弥生時代前期から中期の水田 と水路を検出でき、前期から中期の水田畦畔の 形態が変化する様相や集落が形成される時期と 水田に大畦畔や大溝が造られる時期が一致する こと、集落形成より古い時期から水田が営まれ ていたことが明らかになった。大溝からは県内 5例目の銅鐸形土製品も出土した。

弥生時代中期中葉に遺跡周辺では堆積環境が変化し、溝や流路が埋没する。それに呼応するように水田から墓域に変化する。第78次調査では、方形周溝墓1基、土坑墓3基、土器棺1基を検出した。その後も弥生時代中期後葉、古墳時代前期・後期、飛鳥時代、中世に断続的に水田開発がおこなわれていたようであることがわかった。そのほか、縄文時代晩期末の包含層や縄文時代後期の干潟だった頃の堆積を確認した。



太田・黒田遺跡既往調査位置図(1/10000)

水田区画の形態変化



弥生時代前期後葉



弥生時代中期中葉の方形周溝墓



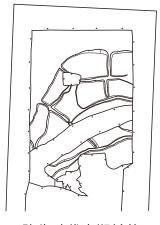


弥生時代前期末



土坑墓





弥生時代中期前葉



土器棺



銅鐸形土製品

古墳時代から中世にかけての集落縁辺部の様子

一 和歌山市 川辺遺跡発掘調査 一

公益財団法人和歌山県文化財センター 川崎雅史

■ 1. はじめに

川辺遺跡は紀ノ川下流域に位置し、紀ノ川が形成した自然堤防と和泉山脈から流れる雄ノ山川の 扇状地に展開している。扇状地上には北方向に山口遺跡や県指定史跡の山口廃寺が、自然堤防上に は下流方向に西田井遺跡や田屋遺跡などの紀ノ川流域を代表するような集落遺跡が連なっている。 また、遺跡の北側を古代の南海道が東西に走り、遺跡付近を熊野参詣道が南北に通るなど、遺跡の 周辺は交通の要衝であった。

川辺遺跡は、これまで当センター及び和歌山市教育委員会・財団法人和歌山市都市整備公社によ り、国道・県道や住宅・商用施設の建設に伴い、数多くの発掘調査が実施されている。調査では、 縄文時代晩期の土器棺墓、弥生時代から古墳時代にかけての集落や前方後方形の周溝墓、古代の掘 立柱建物や道路状遺構、中世の掘立柱建物などが見つかっている。これらから、川辺遺跡は縄文時 代から中世にかけての大規模な複合遺跡であることが明らかになっており、集落や墓地などの位置 も、時代によって変遷していることが窺える。

調査区は遺跡範囲の北西部で、調査前の現状は畑地であった。発掘調査は、和歌山県の委託を受 けて平成26年11月から平成27年2月にかけて面積820㎡を対象に実施した。

■ 2. 調査の成果

発掘調査は3面の遺構面を対象におこなった。

第1遺構面 中世後半頃から近世頃の水田面で、南東部は数十cm高くなり、水田に段差があったこ とが窺える。見つかった遺構には、耕作に伴う鋤溝などがある。鋤溝の方向は、ほとんどが東西で あるが、西端でそれに直行する方向の鋤溝が見つかっている。畦畔は見つかっていないが、犂(か らすき)を引く方向が異なっているのは、水田区画の違いに起因する可能性がある。

第2遺構面 鎌倉時代頃の水田面であるとともに、古墳時代から鎌倉時代の生活面である。南東部 には、やはり段差が存在し、一段高くなっている。見つかった遺構には、水田耕作に伴う鋤溝のほ か、東西方向と南北方向の溝、落ち込み状遺構、土坑などがある。



遺跡位置図



第1遺構面全景(西から)

東西方向の溝は、古代のものと考えら、南東部の段差に平行するように、ほぼ同じ方向に掘削されている。同様な溝は、東側の道路部分の調査でも確認されており、微高地の後背地に延々と掘削されていたことが窺える。

落ち込み状遺構は、調査区中央北寄りに存在する。規模は東西約15 m、南北9 m以上、深さ0.4 mを測る。北側が調査区域外のため全容は明らかでないが、形状も不定形で、再掘削を行っている可能性がある。東西の溝と同様に古代のものと考えられる。



遺構 207 (北から)

土坑(遺構 207)は、南東部の一段高い箇所で検出した。形状は楕円形で長さ 1.50 m、幅 1.25 m、深さ 0.90 mを測る。形状からは素掘りの井戸の可能性も考えられる。遺物は鎌倉時代前期頃の瓦器や土師器、瓦質土器など当時の食器類が一揃い出土し、完形品も多くある。

第3遺構面 古墳時代以前の地形であると考えられ、東西に走る谷状地形と、その南肩付近で小規模な土坑群を検出した。

■3. まとめ

調査区南東部の高まりは微高地の縁辺部で、集落の中心はスーパーセンターや国道 24 号付近であったことが想像できる。調査で出土した遺物の量が少ないのも、集落の中心から、やや離れているからであると考えられる。

東西に走る溝は、古代の水路の用途が考えられ、落ち込み状遺構に関しては、溝との重複関係が 平面で検出できないことや、底の高さがほぼ同じであることなどから、用水を一時的に溜める池で あった可能性がある。

調査区付近が水田となるのは中世前半頃で、それ以降、近・現代まで連綿と水田として推移していることが窺える。



第2遺構面全景(西から)



第3遺構面全景(西から)

近世本陣の復元

―紀の川市 史跡旧名手宿本陣(第7次)の確認調査―

1. はじめに

今回の調査は、史跡等保存整備事業計画に基づく確認調査である。国指定史跡旧名手宿本陣では、昭和62年に第1次調査が行われ、現共同便所下で建物跡が確認された。文献等に記載はなく、本陣という性格上、「馬長屋」の可能性が推測された。調査は、その建物跡の性格・規模と現在は途切れている敷地西側土塀の基礎となる石垣の有無を確認することを目的とした。調査面積は、約84.5㎡である。

紀の川市の東部、名手市場に所在する旧名手 宿本陣の史跡地内には、南側に重要文化財旧名 手本陣妹背家(註)住宅主屋・米蔵・南倉が建 築されており、北側に隣接して旧伊都郡役所が 設置されていた。また、本陣南には、東西に大 和街道が通る。この地は古くから交通の要衝で あったため、中世には地名の由来となる市が開 かれ、市津料が徴収されており、江戸時代には 伝馬所が置かれた。

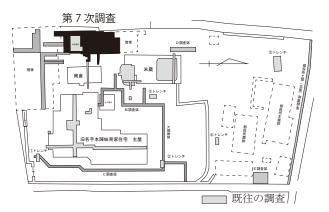
■2.調査の成果

調査では、地表面から 20cm 程度下で多くの 石組遺構が検出されたが、殆どの遺構埋土には、 近現代の遺物が含まれていた。

建物跡 第1次調査で確認した建物跡に関連する礎石や、三和土状の床面を検出した。礎石の残存状況は悪く、抜き取り痕と考えられるピットや三和土から推測される建物規模は、東西約4.5 m、南北6.0~9.0 m程度で、柱間は東西3間、南北2又は3間である。南側には庇又は下屋を備え、北側は土間であった可能性がある。



旧名手宿本陣とその周辺の遺跡



調査位置図 S=1:1,000



建物跡と暗渠(北東から)

西側で検出した石垣に接しているため、建物は土壁で、土塀が接続していたと推測される。

石垣 調査区の西端で南北方向に検出した。確認できた長さは約16 mで、良好な部分で4段の石組が残る。周辺からは、中央に蓮華文を配した塀瓦が数点出土している。

地下式石組遺構 西側は石垣、東側は米蔵に近接して位置する。規模は南北2m、東西4mで、深さ1mである。床面は大小の礫を突き固めている。埋積上位層には近現代の遺物を含む。下位には水成堆積を示す灰色粘土があり、床面には、直径約0.3mの松の丸太の他、竹などが確認されため、貯水兼貯木に使用した可能性もある。西面の石組中央上位には、排水のために開けられたと考えられる、石を配しない箇所が確認できた。

階段を備えた地下式石組遺構 検出した建物跡 と南倉の間で検出した。規模は南北 3.5 m、東西 2.3 mで、深さは約 0.5 mである。埋土には近現代の遺物を含み、瓦片が多い。床面は固くしまり、直上に 0.1 mの水成堆積粘土が確認された。西面は他より大きな直径 0.4 m程度の石で 2 段の階段を構築している。南西端には取水部として 0.1 mの隙間があり底面に結晶片岩を敷いている。西面北側には排水施設として暗渠が接続し、西側の石垣に向かって延びており、貯水し、日常生活に使用するため階段を備えていたと考えられる。

暗渠 東側は階段を備えた石組遺構、西側は石垣に接続する。直上には建物が存在していたと推測される。石材は側石と蓋石の多くは砂岩であるが、間隔をおいて結晶片岩を使用しており、溝を浚う際に開口するため使い分けた可能性がある。

井戸 調査地南西端の石垣西側で検出した。内径 0.7 m、掘り方 2.1 mである。掘り方が石垣の下に入り込み、周辺の石垣は上位のみ積まれているため井戸構築時期より新しい。



地下式石組遺構(東から)



階段を備えた地下式石組遺構(南東から)



石垣と井戸(南から)

調査地は、遺構の出土遺物から昭和 20 年前後、同時に整地されたと考えられる。調査では、限られた敷地の中で工夫された当時の土地利用を垣間見ることができた。これまで何が存在していたか知られていなかった箇所において、多くの遺構が確認されたことは、近世名手本陣の姿を推定できる大きな成果といえる。古くから水不足で苦しんだ地域性や、火災で数回類焼しているという時代背景と照らし合わせると、当時の風景がより鮮明に浮かんでくる。

(註) 妹背家は中世以来の名家で、徳川頼宣の紀伊国入封に伴い、地士頭に任ぜられ、江戸時代末期まで名手組の大庄屋を代々勤めている。元和8年(1622)には、大和街道に面していたため、本陣として参勤交代や御鷹狩等の折に休憩所や宿泊所に使用された。元和5年(1619)、正徳4年(1714)に火災で建物を類焼し、享保3年(1718)年に現在の主屋が建てられた。米蔵・南倉も同時期の建築と思われ、延享3年(1746)に座敷部(御殿)が増築され現在の復元された姿となる。

自然流路脇の微高地は生活域?

一すさみ町 立野遺跡の発掘調査―

公益財団法人和歌山県文化財センター 佐伯和也

1. はじめに

立野遺跡は和歌山県南部のすさみ町に位置し、太平洋に注ぐ周参見川流域に位置する。遺跡は海岸線から約 2,5K m遡った低地部に展開している。

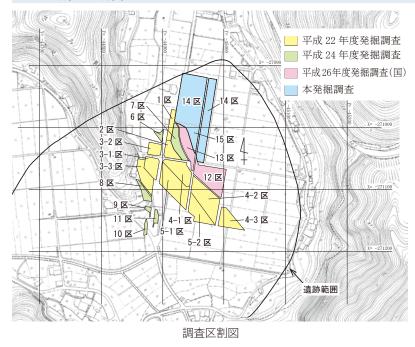
本遺跡の発掘調査は、近畿自動車道紀勢線建設を契機としてこれまでに2度実施されている。本報告は、平成26年度に2事業実施した立野遺跡の概要である。1つは近畿自動車道紀勢線建設に伴う第2次調査、他の事業はすさみ町公共施設移転事業に伴う調査である。これら2事業の調査地が隣接しており、調査期間も殆ど同様であったため併記して報告する。

調査区の呼称は、作業工程上、平成22年度に8,526㎡を調査した近畿自動車道紀勢線建設に伴う第1次調査で1区~5区、平成24年度に1,249㎡を調査したすさみ西インター建設に伴う調査として6区~11区を使用しているため、今回報告する近畿自動車道紀勢線建設第2次調査では12・13区を、すさみ町公共施設移転に伴う調査では14・15区を使用した。

平成22年度の調査では、西側の山裾で検出された弥生時代前期の自然流路(川)から多量の木材が折り重なり出土し、その間から木製品や土器・石器が出土した。特に木製品については容器・農具・工具・狩猟具等と多種多様で、製品や製作途中のものがあった。このような状況から、縄文時代から弥生時代の過渡期における農耕社会成立期の木製品の生産を考える上で貴重な資料を得ている。

2事業の調査区ともに、立野遺跡の範囲の中心部分に当たり、東西を丘陵に挟まれた谷状地形を 呈し現況は水田となっている。以下、各事業の概要を記す。

■2.調査の成果



近畿自動車道建設に伴う第2次調査の調査面積は2,840㎡である。遺構検出面は12区では8層上面で、13区では6層上面と8層上面の2面であった。8層上面で検出した遺構には自然流路、溝状遺構、土坑などがある。自然流路は数条検出し、何れの流路も概ね南北方向に流れ、弥生時代以前のものと弥生時代前期に埋没するものがある。この内、弥生時代以前のものは、ある程度埋没した段階で一定の場所に礫を集め、杭を打ち込んでいた。その性格については明らかでない。

6層上面で検出した遺構には溝状遺構や土坑状遺構、杭列などがある。古代以降の水田面であると 考えられ、溝状遺構や杭列は水田耕作に関係する遺構と思われる。

出土遺物は少量ではあるが、弥生時代前期から中世にかけての遺物が出土している。

すさみ町公共施設移転に伴う調査は 6,079㎡を実施した。遺構検出面は先の近畿自動車道建設に伴う第 2 次調査から続くもので、14 区では 1 面、15 区では 2 面の調査を実施した。明瞭な遺構を検出したのは 14 区の北側および西側の標高が徐々に高くなる箇所である。

ここでは14区で検出した主な遺構について記述する。なお、15区で検出した遺構には自然流路、 落込み状遺構、土坑状遺構、ピット状遺構などがあり、自然流路は、この調査区においても全域で 検出され、網の目状に流れていたことを確認した。

調査区北側において東西方向の溝(遺構 46)を検出した。この溝は、西側の独立山塊の丘陵裾部の微高地から谷部の低い箇所に流れ込んでいたものと思われ、出土遺物から弥生時代中期前葉の時期と考えられる。検出長は 56m、幅は 0.8 ~ 3.1m、残存の深さは 0.33 ~ 0.44m を測る。断面形状は「U」或いは「V」字状を呈し、人為的に掘削された可能性が大きい。

遺構 46 とほぼ同位置で弥生時代終末期の溝(遺構 62)を検出した。西側は遺構 46 と重複し、南東方向に延び自然流路と合流し、延長は不明である。検出長は約 36.0 m、幅は約 2.0 ~ 3.0 m、残存の深さは最も深い箇所で 0.36 mを測る。断面形状は、肩口にかけて緩やかに立ち上がり、底は割合に平らである。遺構 46 の水道を途中まで踏襲していたものと思われる。

調査区北西の微高地上で弥生時代中期の土坑墓と考えられる土坑状遺構(遺構 101)を検出した。 形状と規模は東西長約 2.0m、南北長約 1.0m の長楕円を呈する。残存の深さは 0.16m を測る。底からは礫石器 6 点と石鏃 1 点、弥生時代中期の土器細片、骨片も微量出土した。

■3. まとめ

今回の立野遺跡の調査地は、集落の縁辺部に当たるものと考えられ、平成22・24年度調査に比べ遺構や遺物が少なかった。しかしながら、調査地の北方向にゆくに連れ標高が高くなり、人為的に掘削された遺構が確認できた。居住域も今回調査した東側、西側の丘陵縁辺部の微高地に比定できる。調査地の南半部および北東部については、自然流路が網の目状に流れていたが、これらの流路脇の水利の良い箇所に水田を開発し、弥生時代前期には農耕を営んでいたと推察できる。今後、微高地上の調査において住居址の検出に期待がもたれる。



航空写真 (東から)



土坑墓(北西から)

谷間の子院敷地の確認

―岩出市 根来寺遺跡の発掘調査―

公益財団法人和歌山県文化財センター 佐伯和也

1. はじめに



調査位置図

調査地は旧県会議事堂移転地と「若もの広場」に挟まれた、北から南に高低差のつく谷状地である。大規模農道が建設される以前は 北側の丘陵裾まで雛壇状に水田が延びていた。

調査範囲は道路敷設予定部分で、ほぼT字の形状を呈し、調査の便 宜上、東西方向を1区、南北方向を2区と呼称し調査を進めた。

1区の現況は東から西にかけて低くなり、段状となる。東側の高所は雑種地で、西側の低所はコンクリート敷き資材置き場となっていたが、元は水田である。2区の現況は、東側はコンクリート道路敷き、西側は現有水路となり、谷状地形のため北から南に低くなる。今回の調査範囲には含まれないが、東側水田は雛壇状の地形となり、確認調査を実施した水田である。1区の調査面積は352㎡、2区の調

査面積は547㎡で、合計899㎡の調査を実施した。

■ 2. 調査の成果

1区で検出した遺構には石組排水溝、石垣、焼土坑、埋甕、石組井戸などがある。これらの子院を構成していたとみられる各々の遺構の遺存状況は良好と言えなかった。しかし、この中でも高所と低所を画する南北方向の石垣は1段のみの遺存ではあったが、敷地の範囲を確定する上で重要視すべき遺構である。

2区では石組排水溝、石垣などを検出した。石組排水溝は確認調査において検出されていたもので、調査区の西端の谷川となっていた箇所に流し込んでいたことを確認した。特筆すべき遺構は、南北方向および東西方向の子院の敷地を限る石垣で、その殆どが削平され基底部のみの遺存状況であったが、0.4 ~ 0.6 m大の割合に大きな砂岩の石材を使用していた。

■3. まとめ

今回の調査の成果としては、1区では南北方向の石垣の検出により子院敷地の東限を確認できたことや、下層確認トレンチにより西側を整地し、敷地を築いていることが明白となった。また、2区では敷地の西限の石垣や、南限の石垣の一部を検出したことである。このことにより、かつては独立丘陵であった「若もの広場」と今回検出した敷地の西限の狭間が、北側山麓からの谷川となって南流していたことが判明した。



2区全景(北から)

地宝のひびき

一和歌山県内文化財調査報告会一 資料集

発行日 平成27年7月20日

発 行 公益財団法人和歌山県文化財センター

〒640-8301 和歌山市岩橋 1263-1

TEL: 073-472-3710

Email: maizou-1@wabunse.or.jp

URL: http://www.wabunse.or.jp

印 刷 株式会社 協 和

表紙写真:平井遺跡第4次調査 調査区全景



平井遺跡第4次調查 63 横穴式石室

地宝のひびき

一和歌山県内文化財調査報告会資料集一

- 50年ぶりの発掘調査一和歌山市 岩橋千塚古墳群大谷山22号墳の発掘調査—
- 本州最南端の横穴式石室一すさみ町 上ミ山古墳の出土遺物―
- 古墳時代の洪水で埋まった畠と水田 一和歌山市 井辺遺跡第36次調査・津秦Ⅱ遺跡第10次調査—
- 弥生時代の建物跡と古墳を発掘 —和歌山市 平井遺跡第3・4次調査—
- ・ 荘園開発の拠点?寺院跡の発掘 ー和歌山市 木ノ本Ⅲ遺跡第12次調査ー
- ■川の下を潜る用水路一橋本市 出塔の水道の発掘調査—
- 寺院造営集団の居宅?─海南市 木津遺跡の発掘調査─

公益財団法人 和歌山県文化財センター

〒 640-8301 和歌山市岩橋 1263-1 TEL: 073-472-3710 URL: http://www.wabunse.or.jp/